1. 開催概要

展覧会名	北斎とジャポニスム	
開催施設名	会期	入場者数
国立西洋美術館	平成 29 年 10 月 21 日～30 年 1 月 28 日	371,411 人 (内覧会等含む)

●開催概要

※申請書に記載した当初の趣旨・目的等の達成状況について、データを提示しながら記入

※展覧会評・レビューがあれば、その出典・要旨を提示し、展覧会の客観的な評価を記入

今から約 150 年前、開国した日本は西洋との交流を本格的に再開させ、西洋でも日本への関心が急速に高まった。こうした中、ルネサンス以来の美術の規範に閉塞感を感じていた西洋の芸術家たちが、日本美術の新しさに魅了され、そのエッセンスを消化しながら自らの創作活動を展開した現象を「ジャポニスム」と呼ぶ。

中でも浮世絵師・葛飾北斎は圧倒的な存在で、モネ、ドガら印象派の画家たちをはじめ欧米全域の、また、絵画だけでなく彫刻やグラフィック・デザイン、装飾工芸などあらゆる分野の芸術家たちに影響を与えた。

本展は、近年ジャポニスム研究が盛んになる中、「北斎」を切り口にその現象を紹介する世界初の展覧会となった。世界 10 カ国以上の美術館や個人が所蔵する、北斎の錦絵約 40 点・版本約 70 冊と西洋美術約 220 点とを比較展示した内容は、一般の来場者から「対比が非常に面白かった」「北斎の素晴らしさをあらためて味わった」「日本人として誇らしい」などと大変好意的に受け止められ、結果的に約 37 万人もの来場者を記録した。

大原美術館館長で美術評論家の高階秀爾氏は「(北斎作品と西洋作品の) 互いに関連する作品を対比しながら提示する展示は、個々の作品の魅力と同時に、さまざまの次元での影響関係を通じて芸術創造の秘密に迫る視点も与えてくれる点で、きわめて興味深い」(2017 年 11 月 8 日、毎日新聞夕刊) と指摘したほか、日本経済新聞は本展を「北斎の影響を幅広く考察する展覧会」「欧米の芸術に多大な影響を及ぼした北斎をクローズアップした大規模な展覧会」と大きく記事で紹介し (2017 年 11 月 18 日付朝刊)、毎日新聞も 2017 年の美術界を回顧・総括する記事で「学芸員らの研究調査に基づく充実した企画展」の例として本展をあげ、「北斎の国際的影響を豊富な事例で綿密に検証した」(2017 年 12 月 13 日付夕刊) と高く評価した。

2. 美術品補償制度の活用による国民的利益に関する取組結果

※申請書に記載した、補償制度活用による国民的利益（軽減された保険料の使途、効果等）の達成状況について、データを提示しながら記入

① 入場料の無料化・鑑賞機会の拡大

10 月 30 日（月）の休館日を大学生（大学院生、短大生、専門学校生、高専 4･5 年生を含む）無料鑑賞日とし、展覧会チラシ等で積極的に広報した結果、672 名の参加があった。

また、高校の冬季休暇中にあたる 1 月 2 日（火）－8 日（月・祝）の 7 日間を高校生無料観覧日とした結果、計 761 名の高校生が機会を活用した。

② 教育普及の充実

海外のジャポニスム研究者を招聘し、講演会を開催した。

日時：10 月 21 日（土）14:00～15:30

場所：国立西洋美術館講堂

テーマ：「西洋における趣味：欧州の人々はなぜ北斎を好むのか」※同時通訳付き

講師：ヨハネス・ヴィーニンガー学芸員（オーストリア工芸美術館）

参加者数：135 人（一般対象、当日先着制）

③ 展示作品の質・量の充実

補償制度の活用により、オルセー美術館、マルモッタン美術館からモネの代表作「コルサース山」計 2 作品を出品してもらうことができた。その結果、モネが北斎の「連作」というコンセプトにヒントを得て制作を行ったことを一般来場者にも分かりやすく提示することが可能になった。同様にナンシー派美術館寄託のガレのキャビネットなど優れた装飾美術も借用可能となり、展示品のバラエティーが豊かになったことで展覧会としての質をさらに向上させることができた。

④ 防犯措置の強化

展覧会場に夜間もモニタリング可能な監視カメラを増設し、防犯措置を強化した。

3. 事故の有無（軽微な事故、ヒヤリハット事例も含む）

なし

4. 安全配慮に関する特別の対応

※事故を防止するために実施した特段の安全配慮（特に、輸送や梱包に関することや、展示に関して、他展にも参考となりうること）を記入

作品所蔵者や輸送業者らと十分に協議し、輸送、搬入、搬出時には万全の体制で輸送・展示作業にあたった。また、往復の各輸送便には所蔵者のクーリエが随行し、日本側主催者が指名した修復保存の専門家とともに、貸与作品の開梱・点検・展示・撤去にあたった。

さらに、夜間もモニタリング可能な監視カメラを3台増設し、防犯措置を一層強化した。

5. 紹介事例・今後の改善点等

※国民の優れた美術品を鑑賞する機会の充実という観点から、主催者の自己評価等を記入。その際、他の美術館の参考となる好事例や改善点等を積極的に記入

ジャポニスムにおいて北斎の影響が広く及んでいたことを説得力あるかたちで提示するためには、そのテーマに沿った作品を世界各地から数多く借り集める必要があり、展覧会として実現の難易度は高かった。それにも関わらず本展を実現させることができたのは、本制度適用による経費削減を見越すことができたからであり、本展は「国民が優れた美術品・美術展を鑑賞する機会を充実させる」という制度趣旨に適ったものといえよう。加えて、本展は世界初のコンセプトであり、長年のジャポニスム研究の成果に基づくことから、「日本の展覧会企画力を世界にアピールする」ことにもつながったのではないかと考える。

また2020年に向け、海外から見た日本の魅力を見つめ直そうという機運が高まる中、北斎やジャポニスムについて知る機会を広く国民に提供できたことは、非常にタイムリーな事業であった。特に、中学生以下を無料にしただけでなく、大学生や高校生の無料観覧日も設定することにより、若年層にもその機会を広く活用してもらえたことは、意義深かったと考える。